Column 4

附属桐が丘特別支援学校の自立活動

1　附属桐が丘特別支援学校の紹介

当校は、大学附属校としては国内で唯一の肢体不自由児を対象とする特別支援学校です。２つのキャンパスがあり、１つは、通学する児童生徒のための校舎である「本校」、もう１つが、医療型障害児入所施設に併設される校舎である「施設併設学級」で、入院期間は様々ですが、療育を必要とする児童生徒が在籍しています。

2　附属桐が丘特別支援学校の自立活動

（1）本校における自立活動の様子

自立活動は、個々の障害の状態に応じて一人一人に必要な指導を創造する個別性の高い学習です。しかし、「自立活動の学習が学習・生活場面や将来にどのように生きていくのか」、「学習・生活場面での困りや将来の生活で予想される困りから自立活動で何を学習するか」を考えることは、全ての児童生徒に共通する指導内容として捉えています。その共通性を生かし、児童生徒各々が考えたことを発表し学び合う機会を設け、主体的・対話的で深い学びを目指しています。

そこで、学習・生活場面や将来と自立活動とのつながりを児童生徒が意識できるようにするための仕掛けとして、「テーマを設定した学習」を行っています。発達段階に応じて、どの児童生徒にとっても身近で必要性のあるテーマを考案します。

これまで実践したことのあるテーマの一例を紹介します。小学部では、「教室での学習姿勢」と題し、教室での学習姿勢の崩れを確認し、自立活動で身体の取組を行った後の学習姿勢はどう変わるか実感していくことを通じて、姿勢や動きの状態に気付く力を高めていきます。中学部では、「定期テストの前後の自分」と題し、勉強で生じる疲れに対して、自分に合った改善方法を自立活動で考え、テスト期間中に実践していくことを通じて、忙しさに応じて変化する心身の状態に気付き、自己ケアを実践する力を高めていきます。高等部では、「職場実習に向けて説明書を作ろう」と題し、自分の障害による困難さについて、初めて関わる他者へ分かりやすく伝えられる方法を自立活動で考え、学校外で実践していくことを通じて、必要な支援を自ら求められる力を高めていきます。

座り心地を自ら確認しながら机と椅子の高さを調整している様子

こうした取組を通じて、児童生徒は自立活動を学ぶ意義を捉え、主体的に学習に取り組む様子が見られるようになっていきます。

（2）施設併設学級における重度・重複障害児の自立活動の様子

重度の肢体不自由と知的障害を併せ有し、発達の初期段階にある児童生徒は、睡眠、食事、排泄という心身を健康に維持する生活習慣に困難さが見られます。また、体を動かす難しさから、呼吸・循環機能や体力が弱い場合があったり、身体に力が入り続け同じ姿勢のままいることで疲労が生じたりします。こうしたことから覚醒状態が安定せず、活動中に眠ってしまうこともあります。そこで、外界へ意識を向けられるようになるために、まずは健康状態の改善・安定を図ることが大切になります。

教員の支援を受けつつ、自らバランスを取りながら座る練習

外界を感じ取るためには、触覚、聴覚、視覚等の感覚機能が大切ですが、運動発達の遅れや全面的な介助を要することから受け身がちとなり、日常生活の中で自ら感覚を活用する機会が少なく発達しにくい状況にあります。また知的発達の遅れにより、感じたことを「快－不快」として記憶したり伝えたりすることに時間がかかる場合があります。表出は言語ではなく、表情や身振り等であり、運動機能の障害によりその変化が小さく反応を捉えにくい場合があります。そこで、感覚を受け止めて感じたことを表出しやすい身体づくりを行いながら、保有する感覚を活用していきます。働きかけを繰り返す中で表出が安定して見られるようになっていきます。

そして、こうした表出を教員が受け止め、また期待してやり取りをする中で、信頼関係を築いたり、互いの思いを伝え合うコミュニケーションの力を育んだりしていきます。

3　読者の皆さんへ

当校では、自立活動実践セミナーや筑波大学公開講座において、自立活動に関する実践や研究の成果を発信し、全国の先生方とともに自立活動を学ぶ機会を設けています。ぜひ研修の場としてご活用ください。

（附属桐が丘特別支援学校自立活動プロジェクト　佐々木 高一・高橋 佳菜子）